

キエフ日本語補習校の現状と課題

－巡回指導での授業実践を通して－

前モスクワ日本人学校 教諭

宮城教育大学附属小学校 教諭 柴 生 彰

キーワード：日本語補習校、巡回指導

1. はじめに

補習授業校は、現地の学校や国際学校（インターナショナルスクール）等に通学している日本人の子どもに対し、土曜日や放課後などを利用して国内の小学校又は中学校の一部の教科について日本語で授業を行う教育施設であり、世界52カ国・1地域に205校が設置されており、約2万人が学んでいる。キエフ日本人学校は2009年に文科省より認可を受け、キエフ工科大学の施設を一部借りて毎週土曜日の午後に国語と算数の授業を行っている。

在任していたモスクワ日本人学校からは、サンクトペテルブルクとキエフ日本人学校へ毎年1回、巡回指導の要請を受け、授業を行ってきた。しかし、予算の関係上、今年度からキエフ日本人学校のための巡回指導となった。キエフ補習校の巡回指導は今年で6回目であり、現状と課題について報告したく、本テーマを設定した。

2. キエフ日本語補習校の概要

学校に通う児童生徒は、月曜日から金曜日までは、インターナショナルスクール等の学校に在籍し、土曜日午後のみ補習校に通学している。日本語については、家庭での学習が中心で、補習校の時間が児童生徒にとってコミュニケーションを図る上で重要な時間となっている。今年度の人数は、計7名（小1・2名、小2・1名、小6・3名、中1・1名）である。多い時は30人以上いたそうだが、毎年減少しているのが現状である。しかし、少ない人数ではあるが、低学年、高学年、中学部の計3名の教員（講師）で指導をしている。教科は、国語と算数（数学）の学習のみで、教科書と教科書ワークを中心に行っている。日本の教育に沿って授業を実施しているが、週3時間で年間35週分の学習を行わなくてはならない。そのため、児童生徒は家庭で予習をした上で、補習授業校の授業に参加し、解説してもらったり、問題に取り組んだりしている。

3. 保護者の願い

教員からは、学習能力は高いものの、日本語の語彙力が不十分な児童生徒が多いため、問題を読み取ることの難しさを感じているとのことであった。また、日本の理科・社会の授業を全く受けていないため、教科書はあるものの、実際に使用したことはほとんどないという。このように、保護者も文章を読み取る力、既習していない他教科の経験不足に不安を抱いており、それが課題とも感じているとのことであった。

4. 巡回指導計画の概要

普段行っていない授業を行ってほしいという保護者の要望に応えるため、体験活動、作業活動を中心とした授業構成を計画し、授業を通し、学習に対しての興味関心を高めることを目標とした。

(1) 巡回指導の目的

- ① 学習内容に興味をもち、意欲的に学ぶ児童生徒の育成
- ② 現地教員の意識の向上
- ③ 保護者の協力体制並びに学習方法の意識の向上

(2) 巡回指導の目標

- ① 児童生徒の興味関心を高め、体験や作業を通して、必要な知識の習得をさせ、並びに学習意欲を引き出す。
- ② 児童生徒が意欲的に学び、必要な知識を習得するために、教員や保護者がこれから普段から行えるような授業実践の紹介をする。

(3) 巡回指導の日程

- 1校時 理科(生活科)「水溶液の秘密(小1～中1)」
- 2校時 算数科「引き算(小1)」 「掛け算(小2)」
- 3校時 社会科「地図帳の活用(小6・中1)」

5. 指導と実践

(1) 小学生から中学生まで児童生徒全員が授業に参加できる工夫

～理科(生活科)「リトマス紙と紫キャベツを使用したの実験」～

低学年には、水溶液の色の変化を楽しむこと、高学年・中学生には水溶液の性質について理解し、様々な方法で見分けることができることをねらいとして授業を実践した。導入段階において、4つの透明なコップの中には何が入っているのかを尋ねた。見ただけでは分からない液体を区別するために、子どもたちは、においをかぐことをした。今回4つの水溶液は、水・食塩水・砂糖水・酢を準備し、なめても安全だということ伝え、実際に味見をして確かめさせた。その後、水に溶けている透明な液のことを水溶液ということ、水溶液は3種類(酸性、中性、アルカリ性)あることを教えた。見分ける方法としてリトマス紙を使用し、実際に体験させ、色の変化に気付かせた。高学年・中学生には色の区分についても説明を行った。そして、リトマス紙以外でも紫キャベツを使用すると色の区別ができることを紹介し、実際に体験させた。児童生徒たちは、キャベツを揉んで紫色の液体が出てくること、その液体に別の水溶液を加えると液体の色が変化することに、興味をもって行っている姿が見られた。最後に、その液を使って好きな絵をかかせた。特に低学年は、色の変化を楽しみながら絵をかく様子が伺えた。

(2) 複式授業における授業の工夫

～算数科「ブロックやおはじきを使用した操作活動」～

小1では、繰り下がりの引き算、小2は掛け算の導入部分を行った。小1が2名、小2が1名、計3名での複式であったため、片方の指導を行っている間、他の児童への手が回らないことになるため、課題を準備しなくてはならないと感じ、予めプリントを準備した。プリントには、好きな数字を入れ、互いの学年に問題を解いてもらうものを作成した。最初、1年生に問題を作成させている間に、2年生と個別学習を行った。2年生の児童には、授業最後に問題を解いてもらったのだが、1年生の児童は、自分が作った問題を解いてもらえることがうれしかったようで、「今度は自分で解いてみたい」と言っていた。

小1・2とも、導入段階の授業内容であったため、小1にはブロック、小2にはおはじきを準備し、操作活動を中心に行わせた。1年生は、繰り下がりの計算自体はできてはいたが、10のまとまりからとることが操作活動ではできていなかったため、ノートに計算方法を書かせていった。すると、10から引いた数をすぐに書くことができ、計算もスムーズにできるようになっていった。2年生は、おはじきを使用したことで、ひとつのまとまりがいくつ分あるかをしっかりととらえることができていた。「かけられる数」「かける数」についても合わせて教えることができた。

(3) 児童生徒にとって身近に感じることができる資料を活用した授業の工夫

～社会科「地図帳を使用しての世界遺産探し、及び都道府県の確認」～

導入で地図記号について問題を出した。教科書、地図帳は持っているものの、普段手に取ったことがないということで、半分程度の解答だった。次に、地方の名前について出題した。北海道、四国、沖縄地方については解答できたが、他の地方について名前は知っているものの、どの地方なのかは分かっていなかった。それから、地名の探し方を確認させた。探し方を知らなかったものの、さくいんを見て地名の探す作業についてはすぐに覚えることができた。

地図帳の使い方を覚えたのち、世界遺産について学習させた。世界遺産を選んだのは、海外にいる児童生徒にとって身近なものであったと考えたからである。まず、ランキングを紹介し、世界で1番多い国はどこかを問題として出題した。「イタリアだと思う」と解答し、見事に正解した。「では、自分たちが住んでいるウクライナは何位で、いくつあると思う」と尋ね、自分たちが住んでいるウクライナ・キエフの世界遺産を想起している様子が伺えた。「ウクライナは26位で9か所ある」ことを伝えた。「結構ある」と答えていた。次の質問は「日本の順位と数」についてだったのだが、出題前に、「日本は何位で何個ありますか」と児童生徒から先に質問された。「いくつだと思う」とやりとりをし、現在日本には20個あることを紹介した。そして、「日本の世界遺産がどの県にあるかを探そう」という課題を出した。世界遺産や各都道府県の読み方自体が分からないことが多く、教師や友達に質問をし、調べながら、興味をもって取り組む姿が見られた。

6. 実践を通しての成果と課題

(1) 成果

今回、巡回指導をするにあたって、インターナショナルスクールに通学していることで、日本の教科書は持っているものの、全く開いてみたことがないという事実を知り、驚いた。インターは毎日の宿題が膨大で、日本の教科書を見ている余裕はないという。よって、理科、社会においては初めての得た知識が多く、児童生徒にとっては新鮮な内容だったこともあり、くいつきが非常によかった。保護者からも、「日本の学習を行っていない子どもたちにとってありがたい内容であった」という言葉をいただいた。また、算数においては、通常補習校が行っている形態で行った。現地の教員自身、教師経験がないということで、指導法を教えてほしいとの要望からであった。特に気になったのは、ノートの取り方であった。1年生2名が異なるノートを使用していたので、同じノートを使用して書き方を教えてあげるとよいことを伝えた。普段当たり前のように行っている指導法をアドバイスすることができたのは、大変有効であったと考える。

(2) 課題

今回、授業を考案するにあたって、最も難しかったのが、児童生徒の実態把握であった。当初は、音楽や図工を希望されていたのである。しかも、対象学年は全員ということであった。さらに、児童生徒にとって日本で経験したことがないものをお願いしたい、ということであったので、様々な案を提案したのだが、インターで学習している等の回答で、決まるまでに時間がかかった。また、どのくらい子どもたちが知識や理解をもっているかなどは、メールだけのやりとりではなかなか把握しきれなかった。さらに、補習校にはどのくらい教材が整っているかもほとんど分からず、以前巡回指導した帰任教諭にメールをして確認をした。毎年1度行っているのであるからこそ、必要なことについては、しっかりと引継ぎが必要であろうと感じた。

7. おわりに

授業が終わった後に、懇親会を開催していただいた。懇親会では、今回の巡回指導について率直な意見の交換を行った。まず、補習校側からすると、現在運営しているのは4家族しかいないこと、どの家族も企業か大使館勤務していることから、現在お願いしている教員にはこのように指導してほしいという希望をしたくてもでき

ないとのことであった。3名の教員には経験者もいるのだが、実際問題、運営側が指導法について分からないため、全てお任せしている状態とのことであった（今回は全ての授業を参観してもらったが、普段参観することもないという）。また、授業内容についても、教育観がそれぞれ異なるため、決定に時間がかかってしまったとのことであった。それでも、経験のない、理科と社会の授業をしたことで、今後もそれがよいかもしれないとの話でまとまっていた。しかしながら、当然異動があるため、次年度何名在籍するかは分からないのが現状であろう。私からは、モスクワ日本人学校の実情をふまえ、話をさせてもらった。形態が異なるものの、海外で暮らす日本人の子どもたちの実態について、情報交換ができたことは、大変有意義だと考える。

現在、ロシアはウクライナ問題で直行便が平成27年10月から無く、今年度はベラルーシ・ミンスク経由で行った。もし、今後もキエフ補習校での巡回指導がある場合は、直行便のあるワルシャワ日本人学校に依頼する予定と聞いている。世界情勢によって巡回校が変わってしまうのは仕方がないが、引継ぎをしっかりと行うことが重要である。また、私にとっても、この巡回指導は大変勉強になり、貴重な時間であった。ぜひ今後も継続して行われてほしいと願っている。